

補文標識「の」「こと」に関する 若干の考察

阿 部 忍

0. はじめに

文の中に文を埋め込む形式（いわゆる補文標識）には、「の」「こと」「と」「ところ」「ように」などがあるが、このうち特に「の」と「こと」についてはその使い分けが問題にされてきた。例えば次の文を観察してみよう。

(1) 麻衣は犯人が窓を開けて逃走する {の／*こと} を目撃した。

(2) 国連はアメリカに戦争を止める {*/の／こと} を要求した。

(3) クラス全員が、新校舎建設が決まる {の／こと} を期待していた。

(1)では「の」だけが可能であり（「の」専用文）、(2)では「こと」だけが可能であり（「こと」専用文）、(3)では「こと」でも「の」でも良い（「の」「こと」両用文）。

このような「の」と「こと」の使い分けについては、特に1970年代頃から多くの研究がなされてきた（例えば、久野（1973）、井上（1976）、Josephs（1976）、影山（1977）、坪本（1984、2001）、工藤（1985）、橋本（1990、1994）、野田（1995）、益岡（1997）、大嶋・加藤（1999）、etc.）。

しかし、それにもかかわらず、未だこの「の」「こと」の使い分けの問題についてすっきりした解答が与えられたとは言いがたい。

本稿は、このような「の」「こと」の使い分けの問題に関して若干の考

察を行い、研究の進展に寄与しようとするものである。構成としては、1で「の」専用文、2で「こと」専用文、3で「の」「こと」両用文について、それぞれ考察することとする。4はまとめである。本稿の議論から明らかになることとして特に重要なのは、「の」がその意味的希薄性により「こと」を代行することがあるという点である。

1. 「の」専用文

1. 1. 主文の動詞の意味と、補文の表す事態

「の」だけをとる「の」専用文は、主文述語として上の(1)の「目撃する」のような知覚・感覚を表す動詞を取るか、次の(4)の「待つ」のような動作性動詞を取るということが言われている。¹⁾

(4) テニスコートがかわく {の／＊こと} を部屋で待った。

(4)は野田春美(1995, p.426の(29))から引用した例である。野田は先行研究を踏まえ、「の」専用文の動詞の条件として「埋め込み節(本稿の補文)の表す事態の実現に合わせてしかできない動作を表す」という規定を提示している。²⁾

確かに上の例文においては、「待つ」という動作は「テニスコートがかわく」という事態が実現するものとして、それに合わせてしかできない動作であるように見える。

しかし、次のような例ではどうだろうか？

(5) テニスコートがかわく {の／＊こと} を部屋で待ったが、また降り出した雨のため、結局終日かわかなかった。

(5)においては、「テニスコートがかわく」という事態は結局実現しなかったわけであるが、にもかかわらず「の」専用文となっている。

この議論はあるいは詭弁を弄しているように思われるかもしれないが、決してそうではない。例えば、「の」「こと」のどちらでも取りうる「の」「こと」両用文における「期待する」と比較してみよう。

(6) 多くの人がデモに参加してくれる {の／こと} を期待している。

(7) 多くの人がデモに参加してくれる {の／こと} を期待したが、結局わずかに十数人しか集まらなかった。

(4)(5)と(6)(7)を観察してみても、補文の表す事態の実現性に関して「待つ」と「期待する」の間に差があるとは考えられない。すなわち、(7)では、「多くの人がデモに参加してくれる」という事態が結局は実現しなかったことになる。これは(5)で「テニスコートがかわく」という事態が結局実現しなかったのと同じではないか。

従って、「の」専用文を作る主文動詞を、補文の表す事態の実現性という点から規定することには問題があると言えよう。³⁾

1. 2. 「の」と「こと」の意味素性

では、「の」専用文は、他のどのような特徴によって規定されるのだろうか。

1つの候補は、久野(1973)を受けて影山(1977)が主張した「Concrete」(具体)という特徴である。すなわち、影山によれば、「の」はConcreteに対応し、「こと」は「Abstract」(抽象)に対応する。

確かに、「待つ」より「期待する」方が頭の中で起こっている動作である分だけ抽象的であると言えるかもしれない。

そこで、そのラインで少しく考えてみよう。ただし、単純に「の」は具体、「こと」は抽象、とすることは、以下の2つの理由から受け入れられない。

第1に、なぜ「の」補文が具体に対応するのが明らかなでない。「の」は「こと」に比して意味が希薄であり、「具体」という意味を持っているわけではない。

第2に、「の」「こと」両用文において、補文の表す事態が「具体」でなくとも「の」が現れうるのはなぜか、明らかなでない。例えば、次のような文を考えてみよう。

(8) 美穂はAかけるBがA Bになる {の／こと} を思い出した。

(8)において、「AかけるBがA Bになる」という事態は抽象的であるが、にもかかわらず「の」が現れうる。

それではどう考えるべきか？ ここで、「の」が積極的に何かに対応するとはせず、次のように、「こと」との関連でネガティブに規定してみよう。⁴⁾

(9) a. 「こと」は〔+抽象〕という意味素性を持つ。

b. 「の」はそのような意味素性の指定が無い。

(9a)の意味するところは、「の」専用文において「こと」が現れ得ないのは「こと」の〔+抽象〕という性質によるということである。例えば、「目撃する」「待つ」といった動詞は〔+抽象〕の補文をとらない（ゆえに「こと」は許されない）、と説明される。

また、(9b)が意味するのは、「の」は補文の抽象性には関与しないということである。実際には統語的な制約や文体的な制約もあるので、「の」が現れ得ない「こと」専用文も存在するのだが、それは「の」の意味的性質のためではないと考える。

さらに、「の」「こと」両用文においては、補文（補文標識を除いた部分）の表す事態そのものが抽象的であっても、抽象性に関して指定が無い（いわば無色透明な）「の」が現れうるのは当然ということになる。

さて、上のような規定から予測されることとして、「の」が従来言われていたより広い範囲で用いられうる、ということがある。そのようなケースを次節で見ることにしよう。

2. 「こと」専用文

2. 1. 補文命題の抽象性と、コピュラへの後接

久野（1973）は、次の(10)のような例を挙げ、「名詞節（本稿の「の」「こと」補文）の中の命題が抽象的概念しか表し得ない場合には「こと」しか

とれない」としている。⁵⁾

(10) 太郎が10才である {こと／*の} は確かです。

つまり、補文の内容が「太郎が10才である」という抽象的命題であるゆえ「の」が許されない、という説明である。

これに対し、橋本(1994)は、補文中の命題が抽象的概念しか表し得ない場合にも「の」は現れうるとして、例えば次のような反例を挙げている。⁶⁾

(11) 太郎が10才でない {こと／の} は確かです。

(12) 現代人は、鯨が魚類でない {こと／の} を知っている。

つまり、「太郎が10才でない」「鯨が哺乳類でない」といった命題は「太郎が10才である」という命題と同様に抽象的であるが、にもかかわらず「の」が現れうるという反論である。

そして、橋本は久野の説明を斥け、次のような統語的制約を立てる。

補文が、コピュラ「だ」「である」で終わる場合、即ち、補文標識が「だ」「である」に後接する場合、「の」補文が出現しにくい。⁷⁾

すなわち、(10)で「の」が不自然だとされるのは、「である」+「の」という組み合わせを排除する統語的制約があるからだと説明するのである。

さて、久野に対する橋本の批判は十二分に説得的であるように思われる。また、本稿の1. 2で主張した(9)の規定も橋本の批判を支持する。なぜなら、「の」が抽象性に関して無指定であるという規定は、「の」補文の中に抽象的な命題が現れることを全く排除しないからである。

しかしながら、橋本が上のような「統語的制約」を立てた点についてはどうであろうか。一般に、統語的制約に違反する文はかなり不自然なものとなるはずである。ところが(10)自体、「の」であってもさほど不自然ではない(筆者には全く自然とさえ感じられる)。

したがって、上のような統語的制約を立てる必要は無いと考えられる。もし(10)のような文における「の」を不自然に感じる話者があるとすれば、

それは「の」が持つ文体的な制約によるのであろう（「の」の文体的制約については後述）。

2. 2. 「の」による代行現象

さて、先行研究において「こと」専用文とされているものの中には、よく観察すると、文脈や場面によっては「の」に置き換えてもそれほど不自然にはならないものも多いようである。

例えば、橋本（1990、1994）は、「主文述語に対して、＜（述語のあらわす行為の結果）生産されることがら＞という意味役割を持つ補文としては「の」補文が出現できない」（橋本1994、p.155より）と述べている。このような補文をとる述語として挙げられるのは、「要求する、宣言する、思いつく、命じる、実現する」などの動詞である。⁸⁾

確かに、上のような動詞が主文述語として現れる文は、「の」補文をとりにくい傾向があるようである。例えば、次の(13)～(15)のような文においては、「こと」の位置に「の」が現れることはまず無いと言える。

(13) 米国はフセイン政権が無条件に退陣する {こと／*の} を要求した。

(14) 大統領は戦争が終結した {こと／*の} を宣言した。

(15) 裁判所はM社が多額の賠償金を支払う {こと／*の} を命じた。

しかし、くだけた会話において、次のような文が発せられる場合はどうであろうか。

(16) 彼って私が待合わせ場所に彼より早く着く {こと／の} を要求するのよ！

(17) 俺はアイツに勝負が終わった {こと／の} を宣言してやったんだ。

(18) 妻のやつ、このオレにソファで寝る {こと／の} を命じやがった。

(16)～(18)は、いずれもかなりくだけた会話で使われるような文であるが、(13)～(15)と比べてみると、「の」補文の不自然さが明らかに改善される。⁹⁾ このように、本来「こと」が相応しい文において、「の」が「こと」の代

わりに用いられる現象を、本稿では「の」による代行現象と呼んでおく。¹⁰⁾

上の観察から、「こと」に比べて「の」の方がくだけた文体に馴染みやすく、そのようなくだけた文体においては「の」が「こと」を代行しやすくなる、ということが言えるであろう。

なお、先に述べた(10)における「の」を不自然に感じる話者のケースでは、このような文体的な差（「の」はくだけた文体に馴染みやすく、硬い文体には馴染みにくい）に対して敏感である（許容範囲が狭い）といったことが考えられるであろう。

さらに、以下のように「のは」強調構文に問題の構造を埋めこんだ場合、「の」による代行現象は、より起こりやすくなるようである。

(19) 自分より早く着く {こと／の} を要求するのは酷というものよ。

(20) 勝負が終わった {こと／の} を宣言したのは俺の方なんだよ。

(21) ソファで寝る {こと／の} を命じやがったのは妻のやつなんだ。

なぜ「のは」強調構文に埋めこむと「の」による代行現象がより起こりやすくなるのかについては、理由は定かでない。ただ、強調構文の前半部分が前提を表す部分であり、「の」が「既定」的な意味と馴染みやすいということが、このような現象に影響を与えているといった可能性は考えられるであろう。¹¹⁾

ところで、「の」による代行現象が起こること自体には、「の」が意味的に希薄な要素であるということが関与しているのであろう。この点において、本稿の「の」が〔抽象性〕に関して無指定である」という仮説が重要な意味を持つ。つまり、無指定であるがゆえに「こと」を代行することが容易であると考えるのである。

また、同様に本稿の仮説から予測されるのは、「の」が「こと」を代行することは比較的容易に起こりうるが、逆は困難であるという、「の」と「こと」の非対称性である。すなわち、「こと」が「の」を代行するような

ケースは少なく、あるとすれば、それは意味的に可能な場合、つまり主文の動詞が「+抽象」の補文を許す場合に限られるということである。¹²⁾

この予測は、典型的な「の」専用文とされているものを「こと」で代行しようとしても不可能であるという事実から部分的に確かめられる。例えば、具体的な意味での「見る」を主文述語として用いた文は、いかに文体を硬いものにしても「こと」補文が許されることはないであろう。¹³⁾

㉔ あたい、あいつがポットに何か入れる {の／*こと} を見たんだよ。

㉕ 目撃者は犯人がポットに何物かを投入する {の／*こと} を見た。

実際、硬い文体の㉕における「こと」は、くだけた文体の㉔における「こと」と比較しても、不自然さが改善されるようなことは全く無い。

3. 「の」「こと」両用文

「の」「こと」のどちらも現れうる「の」「こと」両用文について従来から問題とされていることとして、そのような文において「の」が用いられた場合と「こと」が用いられた場合では意味に違いが生ずるか否かということがある。¹⁴⁾

例えば、次の㉔～㉖のような文において、「の」と「こと」で意味に違いが出るだろうか。

㉔ さやかは、友人が自分と同じ水着を着ている {こと／の} に気づいた。

㉕ 英寿は、美穂のイタリア語が上達した {こと／の} を喜んだ。

㉖ その学生は、手当たり次第にナンパする {こと／の} をやめた。

本稿の立場から予測されることは、抵抗無く「こと」と「の」が交替できるようなケースにおいては、仮にこれらの文における「の」と「こと」の間に微妙な意味の違いが認められたとしても、それらは無視できるほどに小さいということである。

というのも、「の」も「こと」も用いられるということは、これらの文における主文の動詞は〔＋抽象〕の補文を許すということであり、「こと」が用いられた場合は必然的に〔＋抽象〕、「の」が用いられた場合は〔＋抽象〕でもあり得る、ということになるからである。言い換えれば、「の」「こと」両用文においては、「の」は「こと」の意味領域を完全にカバーできるということになる。

加えて、このような場合に「こと」が持つ意味はせいぜい〔＋抽象〕ということだけであり、「の」に至っては実質的な意味はほとんど無いということを考え合わせれば、そのようなケースにおける「の」と「こと」の意味の違いは無視できるほどに小さいという上の結論に達する。

もちろん、「の」と「こと」のどちらかが言いやすくどちらかが言いにくいというようなケースにおいては、「の」と「こと」の間の意味が無視できるほどに小さいとは当然のことながら言えなくなる。

また、「2. 2. 「の」による代行現象」で述べたような文体上の違いは、「の」「こと」両用文においてもある程度影響を及ぼすことを予測させる。すなわち、くだけた文体であればあるほど「の」が選択される比率が高まるといったことが考えられる。¹⁵⁾

4. おわりに

本稿では、「こと」には〔＋抽象〕という意味素性を仮定し、「の」にはそのような意味素性が無いことを仮定した上で、それに関連付けて「の」による代行現象を指摘、考察した。

本稿の考察を踏まえて、「の」と「こと」の使い分けについて簡単にまとめると、以下になるだろう。

- I. 「の」専用文…主文述語が〔＋抽象〕の補文を許さない動詞である場合、「こと」は現れ得ない。
- II. 「こと」専用文…統語的制約によって「の」が現れ得ないものを除く

ば、多くが「の」による代行を許す。

Ⅲ. 「の」「こと」両用文…自由に「の」と「こと」が交替できるようなケースにおいては、意味の違いは無視できるほど小さい。

Ⅳ. 「の」による代行現象…本来「こと」が相応しい文において、「こと」の代わりに「の」が用いられることがある。特にくださった会話においてこの現象が起こりやすい。

ところで、Ⅳの「の」による代行現象の記述において、「本来「こと」が相応しい文において」という規定がなされているが、これには曖昧さが伴う。すなわち、「の」による代行を許す「こと」専用文と、「の」「こと」両用文との間の境界線が、一体どこにあるのかは、曖昧なものとなっているのである。そしてこの曖昧さは、「の」による代行現象の存在自体にその原因を求めることができる。

「の」と「こと」の使い分けの問題について従来多くの研究がなされてきたにもかかわらず、未だにすっきりした解答が得られていない理由の1つは、まさにこの点にあると考えられる。

そこで今後は、本稿で指摘したような「の」による代行現象の存在を踏まえた上で、従来「こと」専用文として扱われてきたものと、「の」「こと」両用文として扱われてきたものとを洗い直し、両者の境界線を明らかにしていくことが重要となるであろう。

注

- 1) 特に工藤(1985)、野田(1995)を参照。
- 2) 野田(前掲書)、p.426。ただし、該当箇所における野田の主眼は「同一場所性」が不要であるという点にある。
- 3) 「密接性」といった特徴づけにしても、同様の困難に直面すると考えられる。「密接性」については、坪本(1984、2001)、橋本(1990、1994)などを参照。

- 4) 大嶋・加藤(1999)は、「こと」の抽象性と、「の」の名詞性の低さから「こと」と「の」の分布を説明している。この点で本稿の主張は大嶋・加藤と同じライン上にあると言える。ただし、本稿ではより明示的な枠組みを意味素性を用いて提示するという点、これに関連づけて「の」による代行現象(後述)を指摘する点、名詞性の低さには必ずしも関連付けない点などが異なる。
- 5) 久野(前掲書、p.141)。本稿の(10)は、久野の例文(9)を本稿の形式に直したものである。
- 6) 橋本(1994)、p.158。本稿の例文(11)(12)は、橋本の例文(29)(30)をそれぞれ本稿の形式に直したものである。
- 7) 橋本(1994)、p.154の3-4行目。また、同論文のp.157-159の「1.2. コピュラへの後接」参照。
- 8) 益岡(1997)は、「こと」が「の」に代わらない場合の1つとして「こと」が「概念的に構成された事柄であることを表すとき」(同書、p.20-21)を挙げ、その典型は「実現が期待・予想される事態の場合」(同書、p.21)であるとしている。益岡の挙げる例も、橋本の<生産されることがら>という意味役割を持つとされる補文をとる文と同様、本稿で指摘する「の」による代行現象を許すように思われる。
- 9) (16)~(18)における「の」は話者によってはなお不自然に感じられようが、ここでの主眼は、(13)~(15)における「の」に比べて不自然さが改善されるということにある。
- 10) 工藤(1985)においても、「の」と「こと」が置き換わる現象についての記述がある。ただし、その現象の説明は、主として「の」をとる動詞と「こと」をとる動詞の意味的連続性に拠っている。
- 11) 「の」の「既定」的性質については、例えば、橋本(1994)などにも言及がある。
- 12) ただし、厳密に言えば、主文の動詞が「+抽象」の補文を許すような

場合に「こと」が用いられるのは当然のことであり、そのような文を「の」専用文と呼ぶことはできない。つまり、「こと」による代用のように見えることはあり得ても、真の「の」専用文を「こと」が代用するようなことはあり得ないということになる。もちろんこの議論が成り立つのは、「こと」補文が必ず「+抽象」であるという仮説が正しい場合に限られる。

- 13) 「見る」が抽象的意味で用いられる場合は別である。
- 14) この問題に関しては、例えば野田（1995）はそれまでの研究の立場を手際よくまとめた上で、「の」が用いられる場合と「こと」が用いられる場合とではやはり微妙な傾向の違いがあることを示唆している。また、坪本（2001）も傾向の違いを指摘している。
- 15) ただし、この予測が正しいことを実証するような計量的な研究は、残念ながら本稿ではカバーできない。

参考文献

- 井上和子（1976）『変形文法と日本語（上）』大修館書店
- 大嶋秀樹・加藤久雄（1999）「補文標識「の」「こと」の名詞性とその選択について」奈良教育大学紀要 人文・社会科学48-1.
- 影山太郎（1977）「いわゆる日本語の「名詞化補文辞」について」『英語教育』25-11.
- 工藤真由美（1985）「ノ、コトの使い分けと動詞の種類」『国文学 解釈と鑑賞』50-3.
- 久野暉（1973）『日本文法研究』大修館書店
- 坪本篤朗（1984）「文の中に文を埋めるときコトとノはどこが違うのか」『国文学－解釈と教材の研究－』29-6.
- 坪本篤朗（2001）「「こと」と「の」の再考－モノとコトとトコロ－」『ことばと文化』5，静岡県立大学英米文化教室

- 野田春美（1995）「ノとコトー埋め込み節をつくる代表的な形式ー」『日本語類義表現の文法（下）』宮島達夫・仁田義雄編，くろしお出版
- 橋本修（1990）「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163.
- 橋本修（1994）「「の」補文の統語的・意味的性質」『文藝言語研究・言語篇』25，筑波大学
- 益岡隆志（1997）『複文』くろしお出版
- Josephs, Lewis S. (1976) “*Complementation*” Syntax and Semantics 5, Academic Press, New York.

